

天平の貴族と万葉木簡

1. 恭仁宮跡の調査－朝堂院の調査を中心として－

藤井 整 P 1～P 6

2. 馬場南遺跡での法要と万葉木簡

伊野近富 P 7～P 14

3. 馬場南遺跡の礎石建物－天平寺院の一様相－

中島 正 P 15～P 21

期日：平成 21 年 2 月 28 日（土）

場所：木津川市中央交流会館

いずみホール

主催 京 都 府 教 育 委 員 会
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
後援 木 津 川 市 教 育 委 員 会

恭仁宮跡の調査—朝堂院の調査を中心として—

京都府教育庁文化財保護課
主任 藤井 整

1. はじめに

京都府には、古代に3つの都が存在しました。およそ1200年前の延暦13(794)年には、京都市の中心部に平安京が造られました。平安京に都が遷る10年前の延暦3(784)年には、向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて長岡京が造られました。さらにその45年程前の天平12(740)年に、木津川市に恭仁京が造られました。恭仁京は、3つの中では最も古く、聖武天皇により造られた奈良時代の都です。

恭仁京の中心、恭仁宮には、天皇が暮らし、様々な儀式などが執り行われた内裏、政務や国家の儀式が行われた大極殿や朝堂院、さらには官人達が仕事を行った役所(官衙)など、現代の皇居や国会議事堂、各省庁に相当する政務を行う上で最も重要な施設が造られていました。しかし、そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大坂の難波宮へと移り、さらにその後再び奈良の平城京へと戻されることとなりました。恭仁京は国の首都としての役目を終えた後、天平18(746)年にはその中心部が山背国分寺へと造り替えられました。

2. 恭仁宮跡とは？

恭仁宮跡では、昭和48年度から京都府教育委員会が、そして昭和61年度からは旧加茂町教育委員会(平成19年度からは木津川市教育委員会)と京都府教育委員会が分担して発掘調査を行っています。これまでに分かったことは、以下のとおりです。(第1図)。

○大極殿院地区

大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ1mを残す大きな土壇の

上に築かれた東西が約 45m、南北が約 20m もある大きな建物でした。柱を大きな石材（礎石）の上に建てる礎石建物で、土壇に残る西北隅と西南隅の礎石は、当時のままの位置にあることが調査により分かっています。また、大極殿の北東では東西約 43m、南北約 12m もある大きな掘立柱建物が見つかっています。

○内裏地区

大極殿の北側に、東西に2つ並ぶ塀で囲まれた区画が造られました。このような在り方は、他の都では見られない恭仁宮だけのものです。この区画をそれぞれ「内裏西地区」・「内裏東地区」と呼んでいます。「内裏西地区」は周りを全て板塀（掘立柱塀）で囲んでおり、広さは東西が約 98m、南北が約 128m でした。「内裏東地区」は東・西・南の三方を土塀（築地塀）、北側を板塀（掘立柱塀）で囲んでいました。広さは東西が約 109m、南北が約 139m で、「内裏西地区」より一回り大きく造られました。

○朝堂院地区

周りを板塀（掘立柱塀）で囲んでいたことが分かっています。出入り口となる2つの門跡（朝堂院南門と朝集殿院南門）も見つかっています。内側に建てられていた建物跡（朝堂）は、未だ見つかりません。

○宮大垣

宮城は東西に約 560m、南北に約 750m の大きさを広がり、周りを背の高い土塀（築地塀）で囲んでいたことが分かりました。宮城への出入り口となる門は、いくつか造られていたと考えられますが、これまでの調査では、東南隅付近に造られた東面南門が見つかりません。

3. 平成 20 年度の調査で分かったこと（第 2 図）

平成 20 年度調査は、①「大極殿院地区」の中で、大極殿の北側に「後殿」があったのか確認すること（第 1 調査地点）、②「朝堂院地区」で朝堂の建物跡を見つけること（第 2 調査地点）、③「朝堂院地区」の東側を区画していた塀跡を見つけること（第 3 調査地点）を目的として調査を行いました。

ここでは、大きな成果が得られた朝堂院地区の調査について記します。

○朝堂院地区の調査（第 3 図）

朝堂院地区の調査は、朝堂院の西南地点で実施しました。これまでの調査では、朝堂院の東西と南側を区画する板塀（掘立柱塀）の一部と、南の門（朝堂院南門）

が見つかっていましたが、高位の役人が出仕する「朝堂」は確認されていませんでした。

平成19年度の調査で直径1 m程度の2つの柱穴が見つかり、これが朝堂の建物跡の可能性があると考えられたので、これらが北側へ続いていくかどうかを確かめるために調査を行いました。調査の結果、平成19年度に確認した柱穴とは別に、東西に並ぶ直径1.5～2 mほどの柱穴を6箇所（柱穴1～6）と、その柱穴の両脇に沿うように2本の溝（溝1・溝2）を確認しました。

6つの柱穴は東西に約3 m（10尺）の間隔で並んでおり、その並び方や大きさなどから、「朝堂」の一部を確認した可能性が高いと考えています。柱穴はいずれも不整な円形をしており、いくつかの柱穴には柱を抜き取った痕跡があったので、朝堂は礎石を使わない掘立柱建物だったと想像されます。また、朝堂院地区の調査区では瓦が全く出土しませんでした。このことから、朝堂は瓦葺きの建物ではなかったと想像されます。

この柱穴の南北両端で見つかった2本の溝（溝1・溝2）は、他の都では見つかりませんが、柱穴を掘る時の計画線の役割を持った溝だと考えられます。

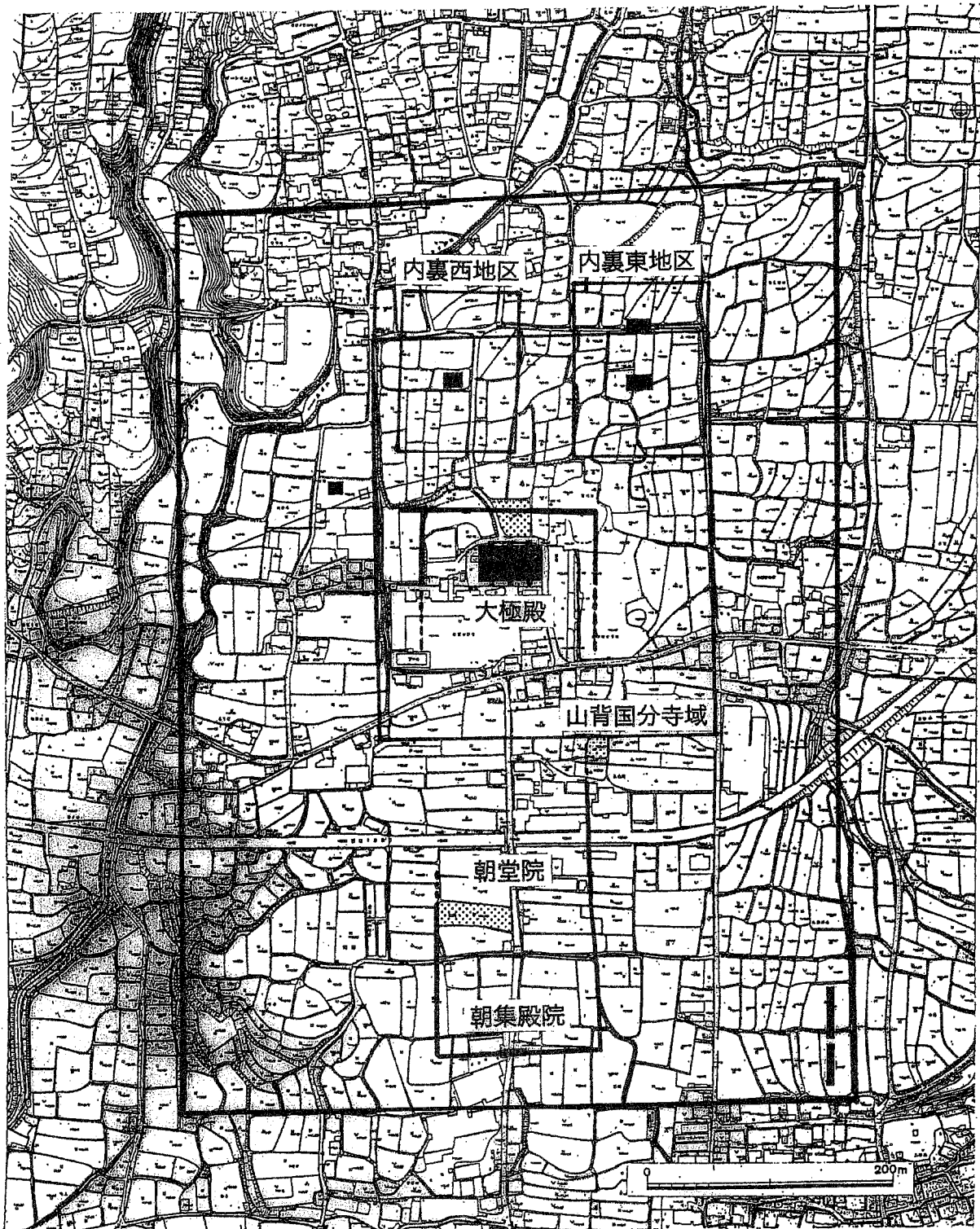
4. おわりに

今回の調査では、朝堂院地区で初めて「朝堂」と考えられる建物の手がかりを確認することができました。『続日本紀』^{しよくにほんぎ}には、天平16（744）年の正月元旦に朝堂に官人を集めたという記載があります。このことから、恭仁宮は足かけ5年と短命な都でしたが、朝堂など宮の重要施設については整備が進んでいたと考えられています。

今回見つかった柱穴の大きさは、平城宮の朝堂で見ついている柱穴とほぼ同じ大きさであることから、恭仁宮の朝堂も平城宮と変わらない大きさのものが建てられていた可能性が高まりました。

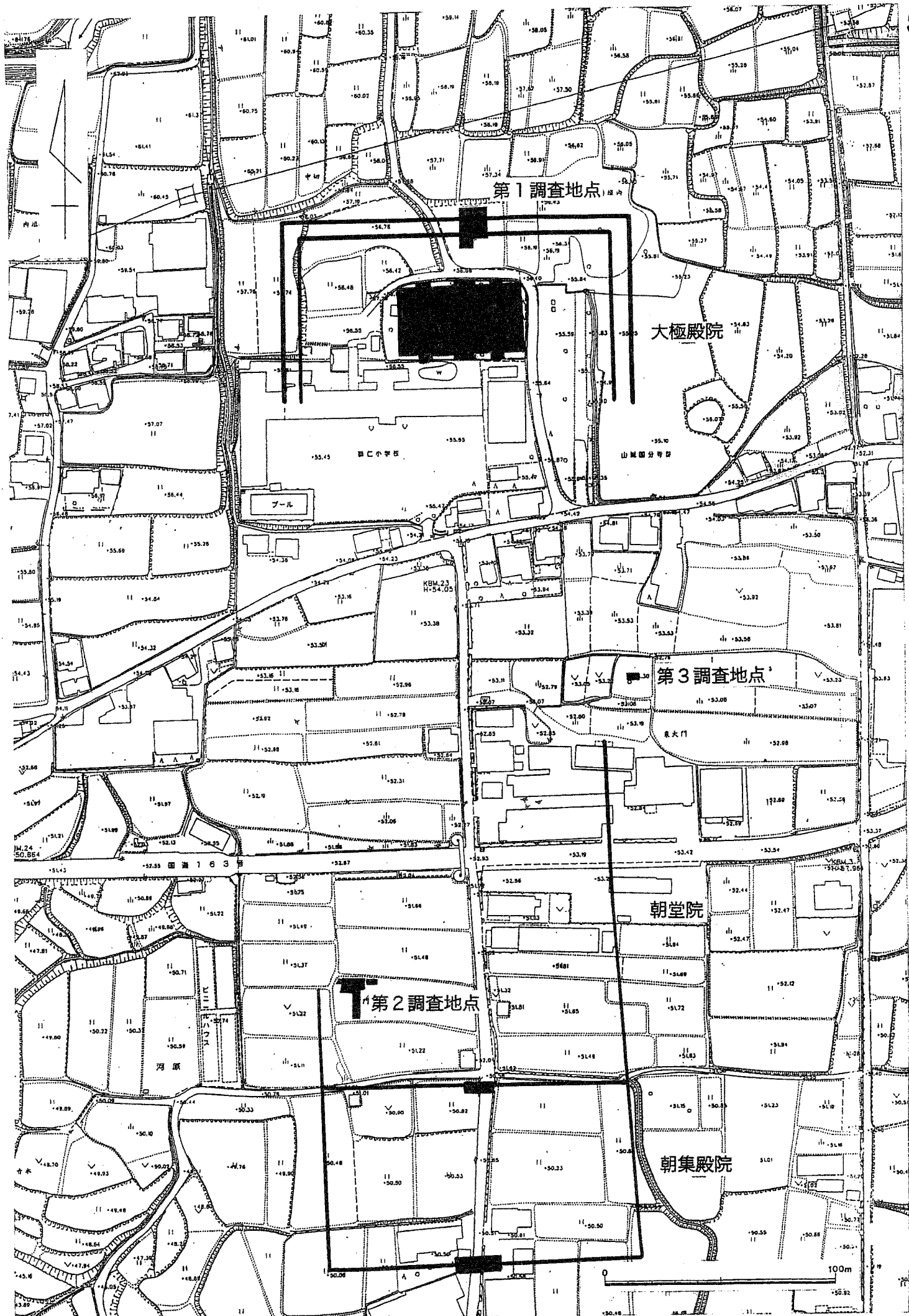
朝堂は平城宮では12堂、難波宮では8堂が配置されていたことがわかっています。恭仁宮では、まだ建物の一部が見つかったばかりです。朝堂の建物の大きさや、全体にいくつの堂が存在したのか、またその配置はどうなっていたのかということは、恭仁宮の歴史的意義を考える上でとても重要な点です。今後の調査に期待が持たれます。

最後に、調査に参加された方々や、お世話になった方々に深く感謝申し上げます。

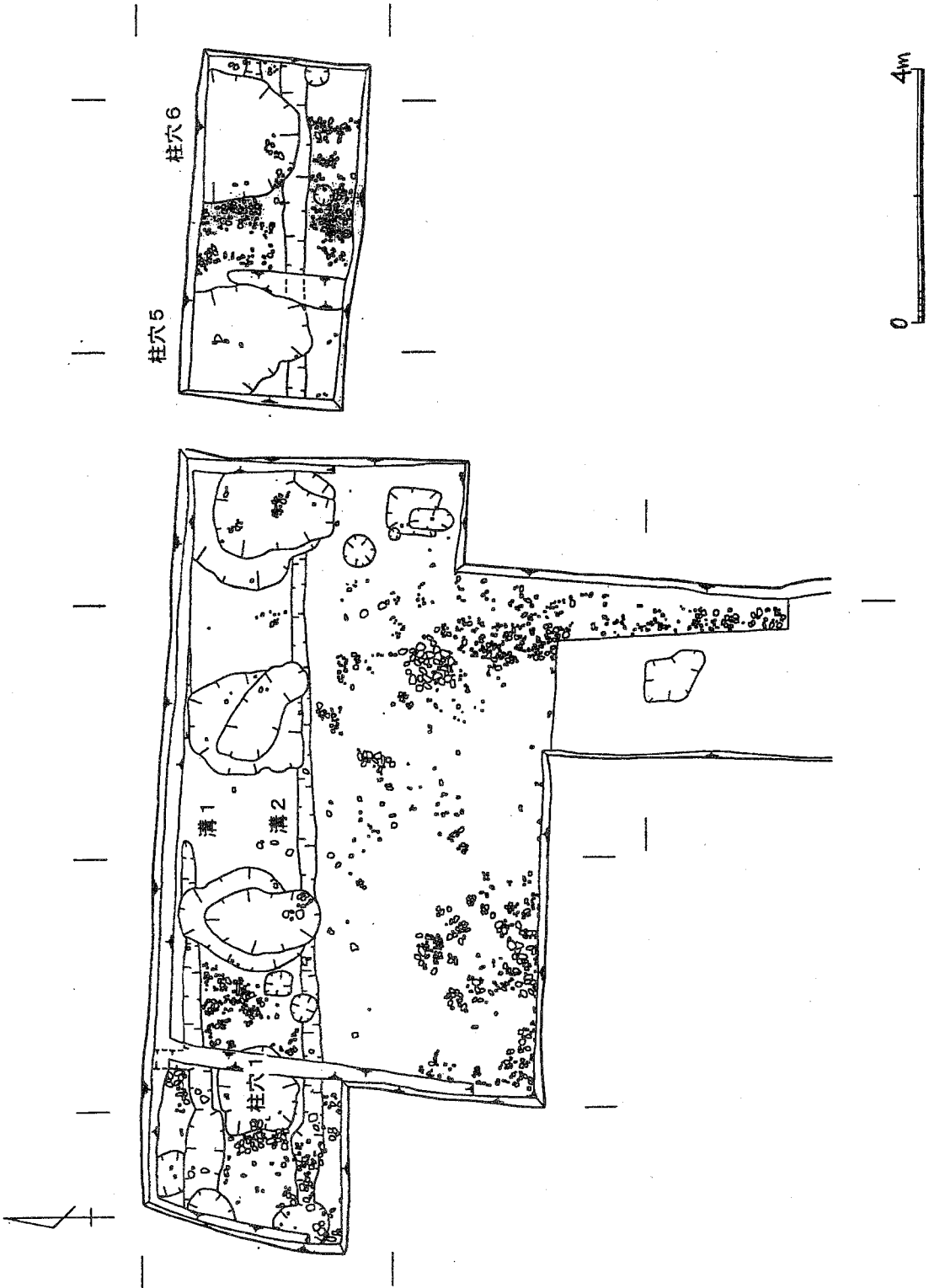


第1図 恭仁宮全体図 (S=1/5,000・アミカケが調査地点)

※ ■はこれまでに見つかった主要建物跡



第2図 調査地位置図 (1/2,000)



馬場南遺跡での法要と万葉木簡

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

次席総括調査員 伊野 近富

1. はじめに

京都府木津川市馬場南遺跡で、万葉集に記載された和歌が書かれた木簡が出土した。また、須弥山をイメージしたと思われる彩釉陶器(単釉・三彩)や、大量の灯明皿が出土し、この地で法要のような行事が行われたことが、明らかとなりました。神雄寺と書かれた墨書土器が出土しましたが、古代の文献にはない寺で、なぜ、大量の灯明皿や歌木簡が出土したのかを、考えたいと思います。

2. 立地

平城宮から北へ約5kmの地点に位置します。北^東西に行けば恭仁宮へ、北へ行けば木津川の泉津^{いづみのつ}へという場所にあります。

3. 遺構

奈良時代中期に丘陵を削って平坦にし、掘立柱建物SB01を建設しています。この高台(平坦地)の東側から南側にかけて川SR01が流れています。また、東側の谷に掘立柱建物SB03⁰²を建設しています。この時期の後半に川SR01を改修したようです。また、あわせて井戸SE01や柵01などを建設したようです。

奈良時代後期には掘立柱建物SB02⁰³を建設しています。川SR01は埋没し、代わりに溝SD02が、川SR01と同様の場所を流れています。

4. 出土遺物

出土遺物には次のような物があります。土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・甕・壺・平瓶・円面硯・転用硯。緑釉陶器：壺・塔鉢蓋・須弥山様陶器、三彩陶器：香炉・小壺・托・須弥山様陶器。墨書土器。その他：陶製鼓胴。瓦類：軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦(平城宮式瓦)・塼、細い管状製品、木簡、建築部材、漆箱、火付け棒、

わとうかいちん まんねんつうほう どば ぼくしょじんめんどき
 和同開珎・万年通宝、土馬、墨書人面土器、ふいごの羽口、製塩土器等があります。

5. 時期

出土した土器から、奈良時代中期から後期にこの遺跡は営まれていることがわかります。瓦は平城Ⅱ期（720年～740年頃）と平城Ⅳ期（757～770年頃）に製作されたものが集中しています。

6. まとめ

ポイント1 古代の幹線道路の近辺に位置します。特に、恭仁宮との関連が深いと考えられます。

ポイント2 奈良時代中期には大量の灯明皿を使用し、6箇所ほどに集中して廃棄されています。また、生活用品（甕や皿）もあります。センターの調査区で見つかった建物は掘立柱建物のみです。瓦の量は少なく、屋根の一部に葺かれたと考えられます。

奈良時代後期にも大量の灯明皿を使用しています。センターの調査区の建物は掘立柱建物のみです。瓦の量は少なく、屋根の一部に葺かれたと考えられます。

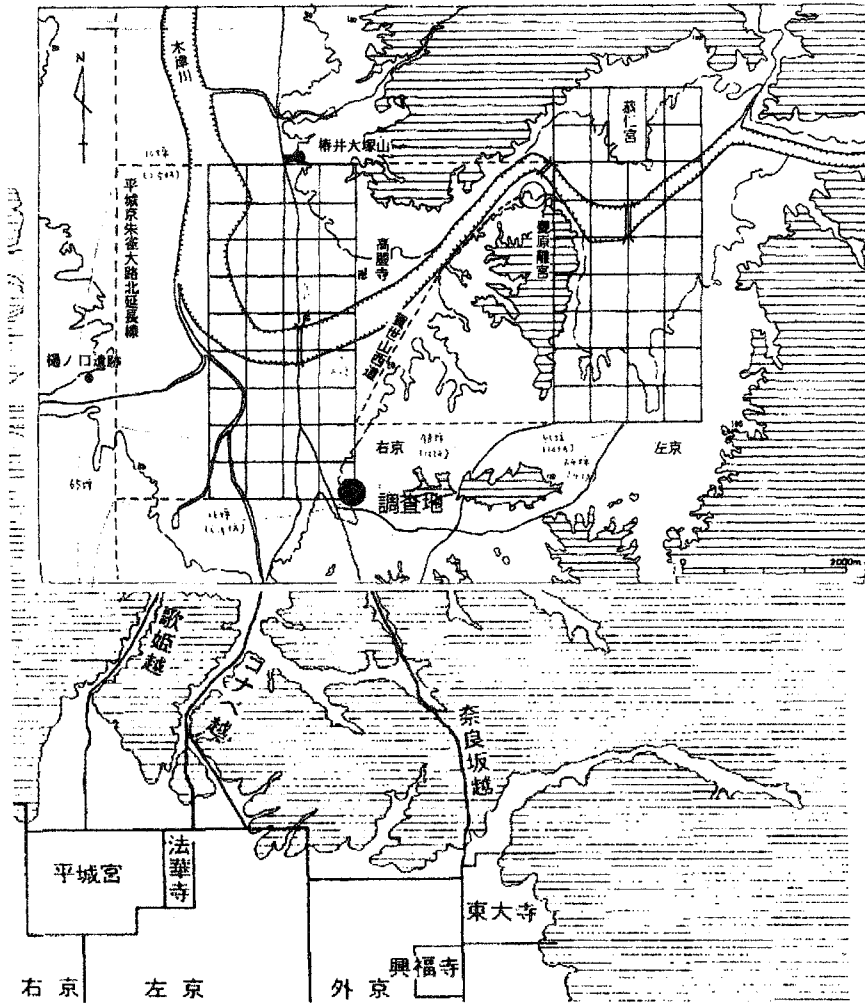
「神雄寺」と書かれた墨書土器が複数出土しています。最後には施設は廃棄されたようです。法要の実態を示す資料と考えられます。

ポイント3 センター側の建物構造は寺院というより、簡素な邸宅の存在を窺わせます。「大殿」と書かれた墨書土器は、天皇や大臣クラスの貴族を指す用語なので、藤原氏や橘氏との関連が注目されることです。特に南山城は橘諸兄と関係が深い（井手寺、恭仁京）地域と言われています。

ポイント4 「神雄寺」という寺院名から、神仏習合との関連が注目されます。

ポイント5 歌木簡が出土しています。「阿支波支乃之多波毛美智」11文字からなり、万葉集巻10、2205番にある、秋雑歌 黄葉を詠める「秋萩の下葉もみちぬ あらたまの 月の経ぬれば風を疾みかも」を一字一音で表記したものです。現在知られる万葉集の表記とは相違しています。万葉集の歌木簡が出土したことは遺跡の性格を考える上で極めて重要な資料と言えます。

ポイント6 須弥山様陶器は、20 cm～25 cm程度、高さ15 cm程度のブロック状に作られており、組み合わせて、山や水の世界を造形していたようです。これほど、立体的に復元できる例は日本で初めてであり、奈良時代の仏教を考える上で貴重な資料となりました。



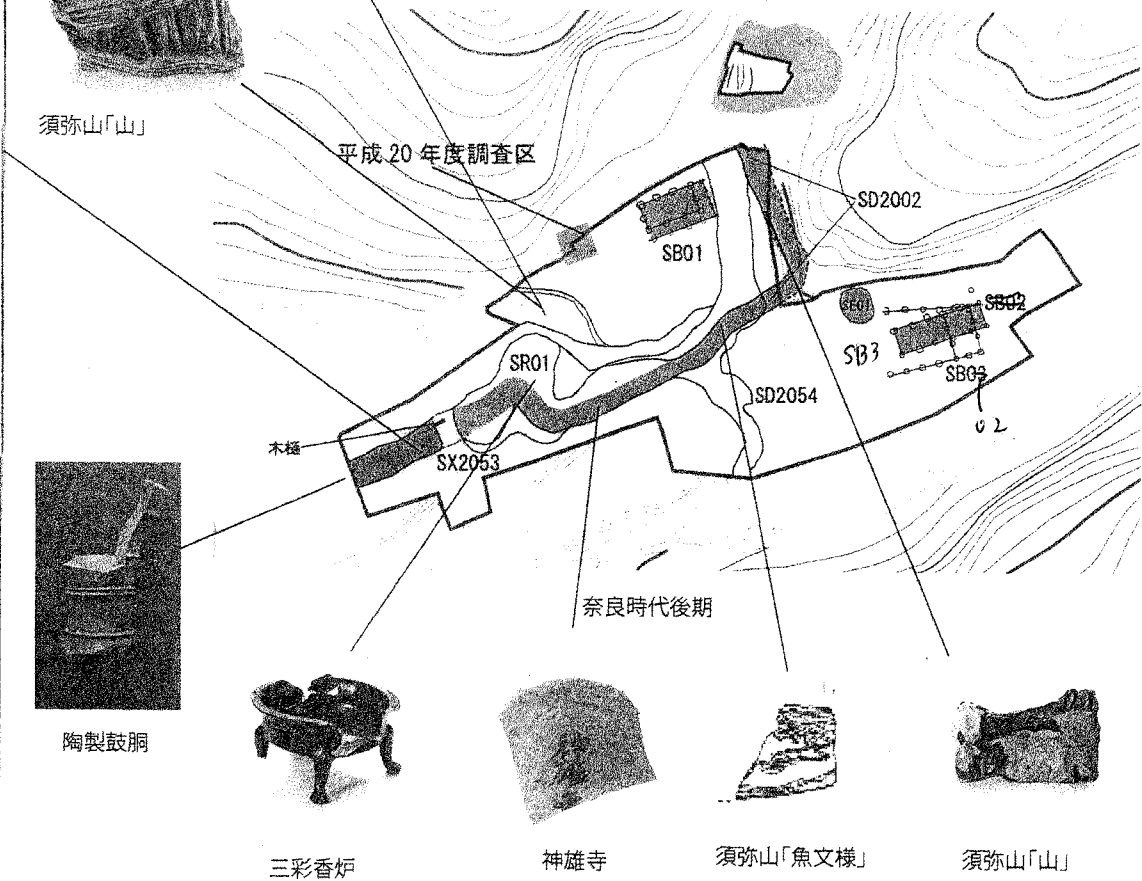
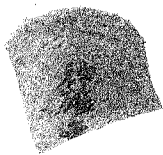
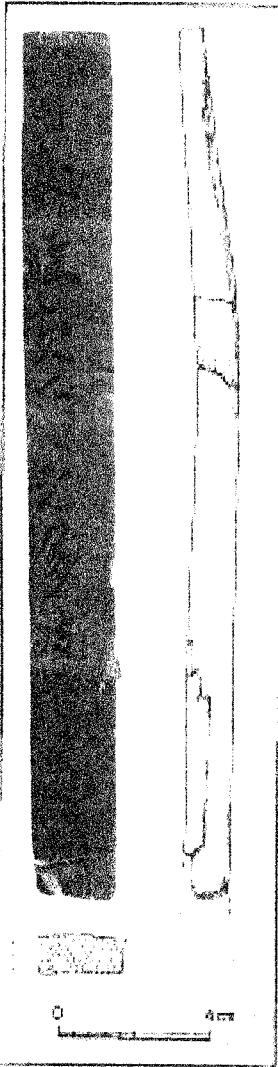
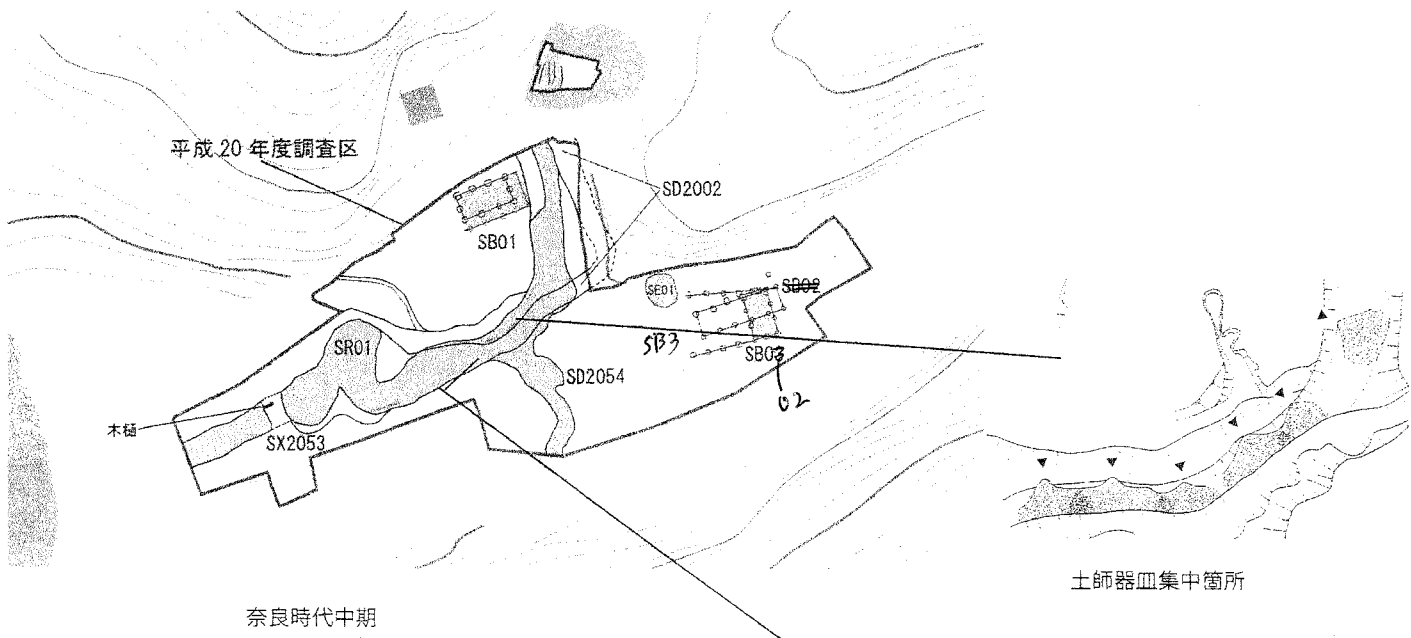
伊野「恭仁宮・恭仁京復原案の副案」『京都考古』第65号1992

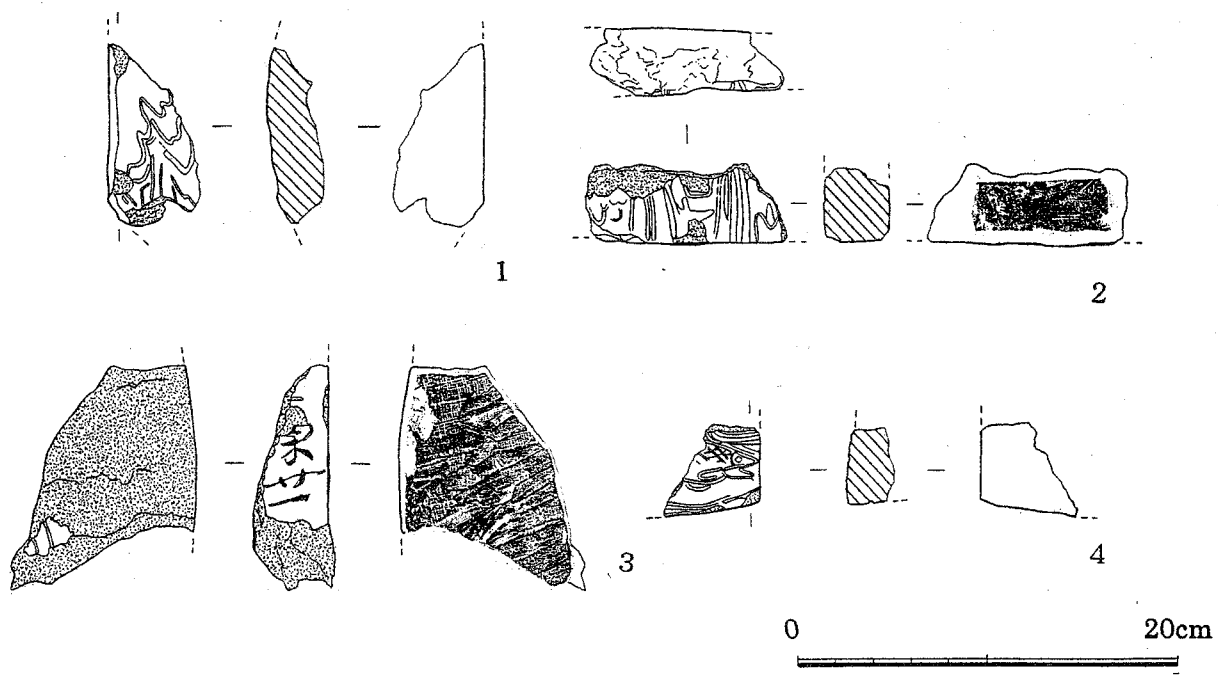
木津町調査報告第3集1980

奈良時代の都城と調査地

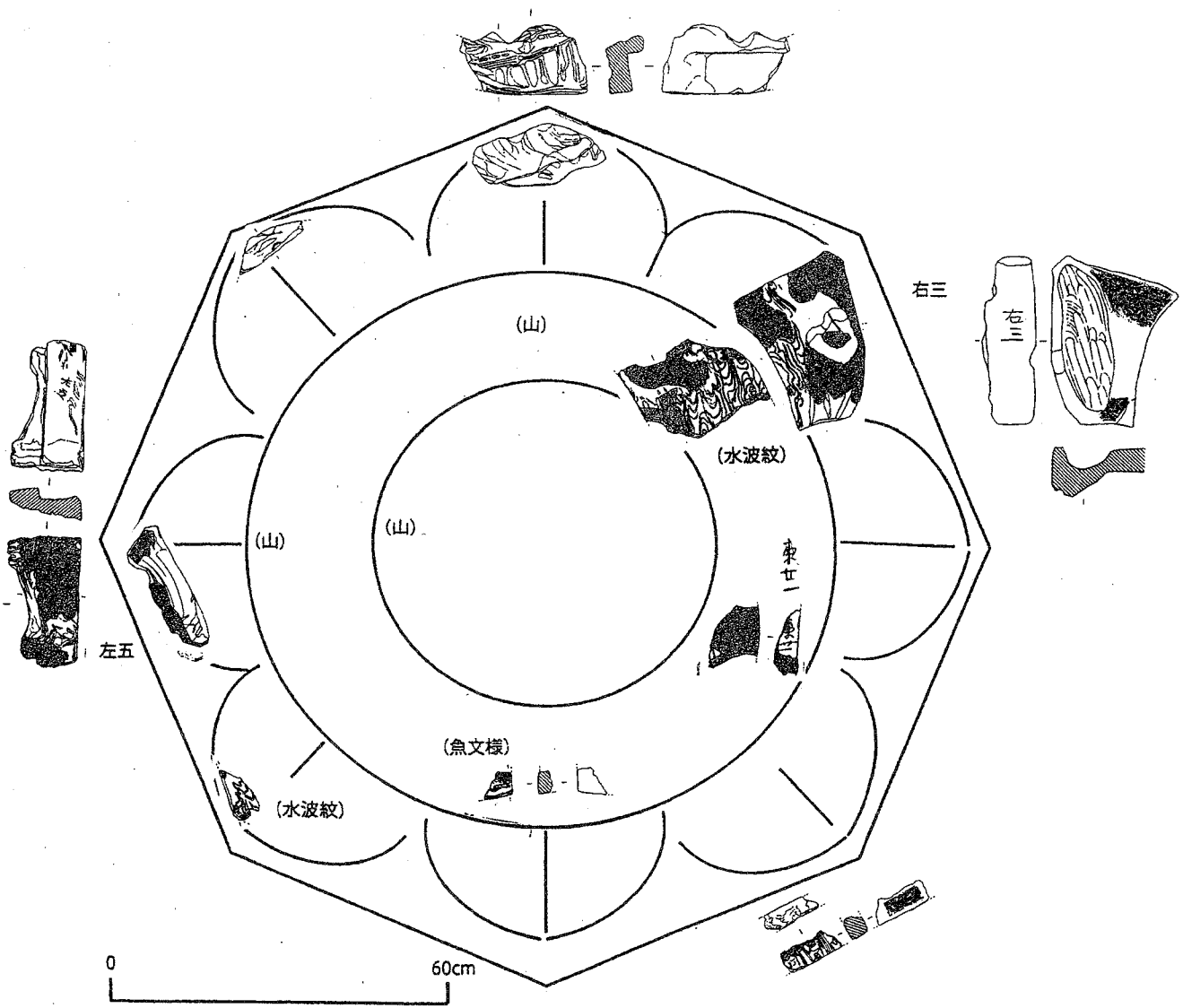
奈良時代略年表

西暦	和暦	おもなできごと	
710	和銅3	平城遷都	奈良前期 古事記・風土記 日本書紀成立
711	和銅4	法隆寺五重塔塑像群成る	
726	神亀3	興福寺東金堂建立。須弥壇の上面を飾っていた「瑠璃地」あり。	
729	神亀6	長屋王の変	奈良中期 聖武天皇・光明皇后 による仏教興隆
737	天平9	藤原四家(4月房前・7月武智麻呂・麻呂・8月宇合)死す。9月、橘諸兄大納言に。	
740	天平12	5月、聖武天皇が橘諸兄の相衆別業に行幸 10月、藤原広嗣の乱、天皇東国巡幸 12月、天皇恭仁に行幸し、恭仁宮の造営を開始(恭仁京遷都)	
741	天平13	國分寺・國分尼寺建立の詔	
744	天平16	2月、難波宮遷都。12月、金鐘寺(東大寺の前身)および朱雀路で燈1万坏を燃やす(燃燈供養)	
745	天平17	平城遷都。行基、大僧正となる 天皇体調不良。京・畿内の諸寺および諸名山淨処で薬師悔過(けか)を行う	
746	天平18	大伴家持、越中守に任じられる。 天皇、金鐘寺に行幸し、大仏の前後で燈1万5千7百余坏を燃やす(燃燈供養)	
749	天平勝宝元	孝謙天皇即位	
752	天平勝宝4	東大寺大仏開眼供養	
757	天平宝字元	橘奈良麻呂の変(変が起こったのは、天平勝宝9年6月。改元は8月。)	
763	天平宝字7	伊勢國多度神宮寺創建	
764	天平宝字8	惠美押勝(藤原仲麻呂)の乱。道鏡の台頭	
767	神護景雲元	東院の玉殿完成。その殿舎に瑠璃の瓦を葺く。	
770	宝龜元	光仁天皇即位。	
782	延暦2	宮殿・寺院の造営停止。	
784	延暦4	長岡京遷都	

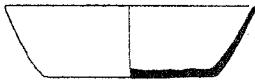




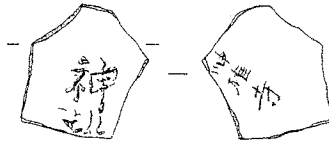
須弥山様陶器実測図 (一部)



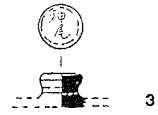
須弥山様陶器の配置復原案



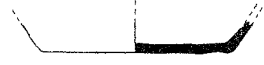
1



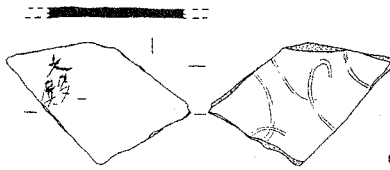
2



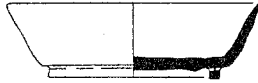
3



4



6



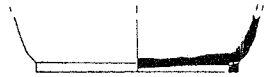
8



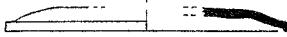
5



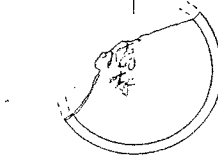
7



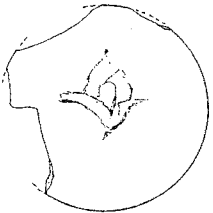
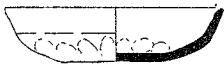
9



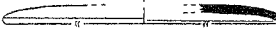
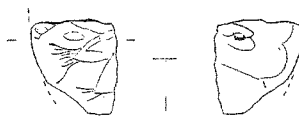
10



11



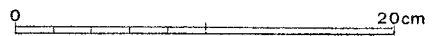
12



13

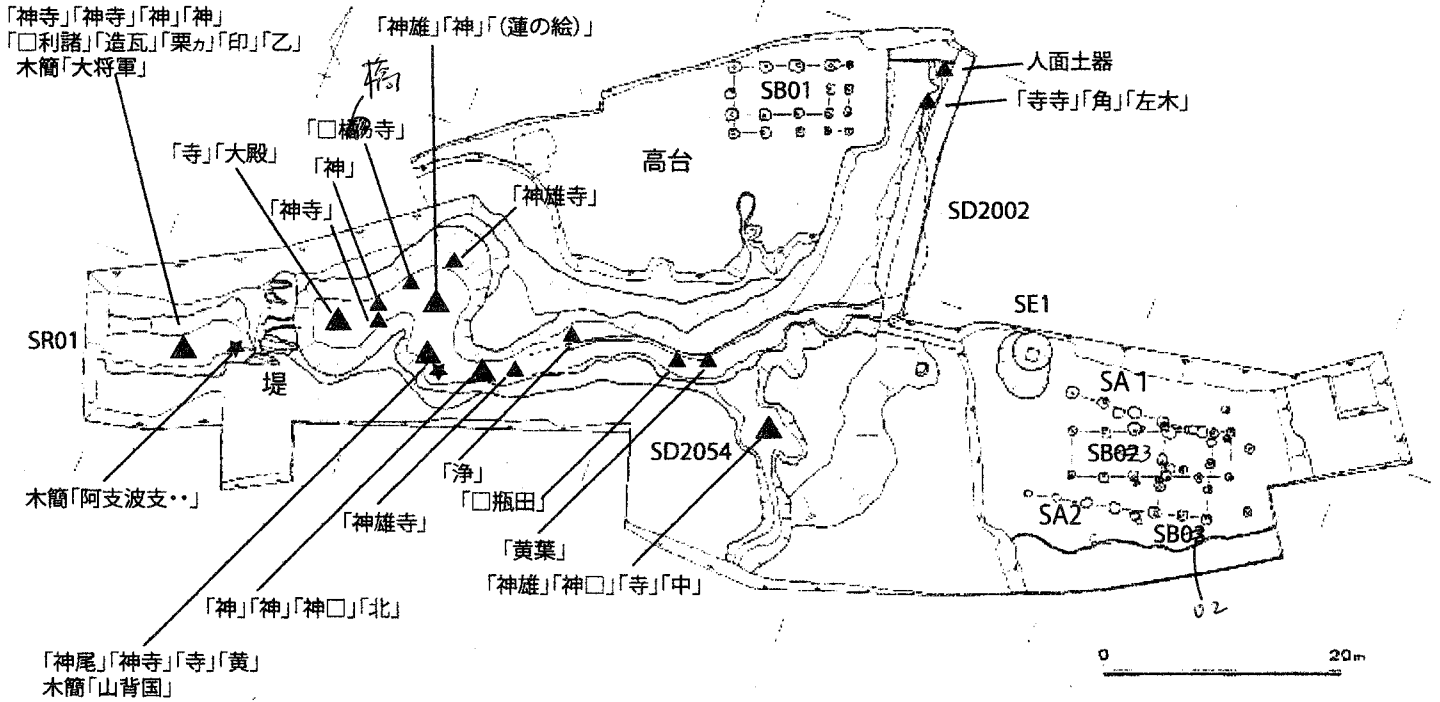


14



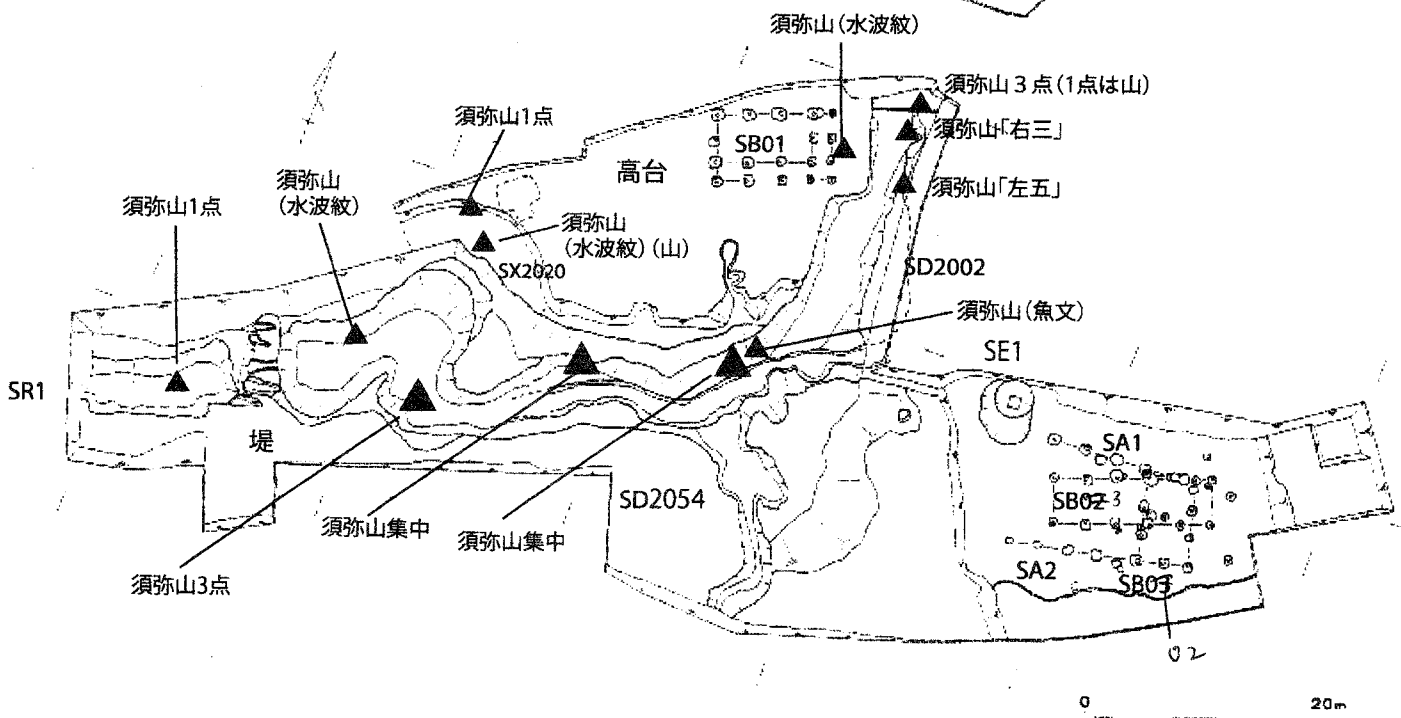
墨書土器・木簡出土地点

木津川市調査地



須弥山様陶器出土地点

木津川市調査地



馬場南遺跡と周辺遺跡の出土瓦

	平城宮式瓦の型式	城陽市		井手町		木津川市		京都側奈良山		奈良山		奈良市		その他	奈良文研軒瓦データベース、平城宮/全体数			
		平川廃寺	正道遺跡	久世廃寺	井提廃寺	岡田池瓦窯	石橋瓦窯	恭仁宮	高麗寺	樋ノ口遺跡	馬場南遺跡	五領池東瓦窯	押熊瓦窯			歌姫西瓦窯	音如ヶ谷瓦窯	中山瓦窯
Ⅱ-1軒丸瓦	6311B						○		②					○	○	◎	西隆寺、平城京左京三条二坊	1020件
Ⅱ~Ⅲ軒平	6663系								①								6663系はほとんど平城宮、ほか薬師寺、法華寺	4497件
Ⅱ-2軒丸瓦	6308C但し馬場南出土資料は鋸歯文なし								①					○		◎	平城京左京二条七・八坪、平城京左京七条一坊十六坪、平城京左京八条一坊	82/88件
Ⅱ-2軒丸瓦	6135系								②								6135Aは佐保山瓦窯	1634件
Ⅱ-2軒平瓦	6572A								⑥							◎	平城京左京三条一坊七坪、東三坊大路、頭	16/22件
Ⅱ-2軒平瓦	6572G								⑥								平城京左京三条三坊六坪	0件
Ⅱ-2軒平瓦	6681F								①								平城京左京三条一坊・東三坊大路(左京一)	0件
Ⅳ-1軒丸	6316Dc但し馬場南出土資料は鋸歯文なし								④		○						西隆寺・平城京二条大路南・右京八条一坊十三・十四坪	0/3件
	6316D																平城京二条大路南・羅城門・右京三条一坊・右京八条一坊・左京三条一坊・法華寺・東院南方遺跡、西隆寺・元興寺・葛城寺	0/22件
Ⅳ-1軒丸瓦	6316系								④								6316系はほとんど平城宮、ほか各所で1~2点出土	147件
Ⅳ-1軒丸	6012B								③							◎	羅城門・唐招提寺・平城京左京三条一坊・左京七条一坊	17/21件
Ⅳ-1軒平	6768B								①	○		○					法華寺阿弥陀浄土院16点、平城京左京2-2-13、左京1-5-4	0/23件
	不明								⑤									
奈良末以降軒丸瓦	薬師寺瓦								②					○			薬師寺報告fig.33-38	

軒丸6012B型式は軒平6572型式と組み合わせ(奈良文研瓦基準資料Ⅱ)

Ⅱ期

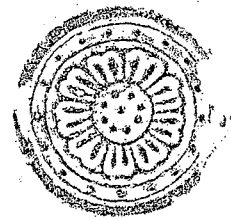
Ⅳ期



6311B



6572A



6316DC



6308C



6572G



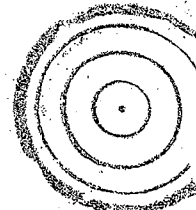
6316系



6135系



6681F



6012B



6768B

馬場南遺跡の礎石建物 —天平寺院の—様相—

木津川市教育委員会 社会教育課

課長補佐（文化財保護室担当） 中島 正

1. はじめに

木津川市教育委員会では、馬場南遺跡における(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターによる大きな調査成果を受け、平成20年度木津川市内遺跡発掘調査事業の一環として、遺跡の保存と今後の国史跡指定を目指した遺跡の範囲と内容確認のための試掘調査を、開発予定地外の丘陵部において実施しました。

調査地の選定にあたっては、ここが寺院跡であるとともに祭祀遺跡の性格をもつことも考慮し、府埋文センターの調査によって大規模な燃燈供養の法会が営まれた平坦面（平坦面1）の北側と東側の尾根上、そして北側に伸びる谷部において、調査を実施しました。

調査の結果、府埋文センターの調査によって検出した掘立柱建物跡（SB01）の北側丘陵裾で、礎石立建物跡（仏堂）を検出することができたのです。ここは、かつて天神山11号墳と認識されていた箇所、尾根裾を削って造成した狭い平坦面に、直径7m程度の墳丘状の隆起がみられました。結果的には、この隆起が仏堂内の須弥壇の高まりと判明したのです。

調査地名	京都府木津川市木津天神山 地内
調査主体	木津川市教育委員会（教育長 久保三左男）
調査期間	平成20年9月22日～平成21年2月20日
調査面積	約150 m ²

2. 調査の概要

検出した仏堂跡は、計5個の礎石を残しており、側柱と心柱のみで建つ特異な構造の東西棟入母屋造り建物と考えられ、正面と背後にはさらに裳階が付き、軒を長く伸ばしています。柱間は、桁行が16.5尺（約4.9m）で背面5間（3.0尺・3.5

尺・3.5尺・3.5尺・3.0尺)、正面4間(3.0尺・5.25尺・5.25尺・3.0尺)で、梁間^{はりま}15.0尺(約4.5m)4間(3.0尺・4.5尺・4.5尺・3.0尺)と復原できます。正面と背面で柱間が異なる点については、背面の中央3間分(10.5尺)を二等分して、正面に2箇所の扉を設けた結果と考えられます。なお、建物造営尺には天平尺^{てんぴやうしゃく}が用いられており、1尺=0.297mとなります。また、この建物の方位は、真北に対して約20度程度西に偏しており、火災により焼失したことがわかります。

仏堂内部の須弥壇は、13.5尺(約4.0m)×12.0尺(約3.6m)の規模をもち、側面には平瓦の凸面^{とつめん}を表にして貼り付けていました。検出状況は、この平瓦がすべて外側に剥れて凹面^{おうめん}を上にした状態で出土しています。したがって、当初の須弥壇の高さは、平瓦1枚分の長さから30cm程度と推定できます。建物と須弥壇の関係は、柱の心からで3尺(約0.9m)程度の隙間しかなく、実際にはもっと狭いため、建物内部は仏の空間として人の出入りは不可能です。なお、心礎^{しんそ}の抜き取り穴と考えられる中央付近は盛り上がり、当初から心柱の周りが築山状^{つきやま}の高まりであったことがわかります。

出土遺物としては、須弥壇周辺から多量の塑像片^{そぞう}や博仏片^{せんぶつ}、焼壁土、金属製品が出土しました。塑像片はその特徴から等身大の四天王像^{してんのう}と考えられ、細片化していますが、出土位置の偏りから須弥壇上での位置関係(持国天・増長天・広目天・多聞天^{たもんてん})を特定することができます。博仏片は、その形態を特定できるものが1点しかありませんが、三重県名張市の夏見廃寺^{なつみはいじ}出土の方形三尊博仏^{ほうけいさんぞんせんぶつ}と同じ原型によるものであることがわかります。焼壁土は、建物四面のうち東・西・南の中央2間に扉が付き、それ以外は壁と考えられるため、大量に出土します。金属製品には、鉄製の円形鋸留扉金具^{えんけいびやうどめとびらかなぐ}や建物に使用された釘、堂内荘嚴具の銅製鋸^{どうせいびやう}や塑像の鉄芯^{てっしん}などがあります。

また、仏堂周辺からは、雨落ち溝付近^{あまお}で平城宮式軒丸瓦^{へいじやうきゆうしきのきまるがわら}を含む屋瓦類の出土をみますが、全体的に出土量が少なく、屋根全体に瓦が葺かれていたとは考えられません。おそらくは、大棟^{おおむね}など一部に使用されたようです。なお、土器類には、土師器^{はじき}・須恵器^{すえき}・緑釉陶器^{りよくゆうとうき}などがありますが、いずれも細片です。

3. 調査成果のまとめと課題

※ 「神雄寺」本堂は、中国風の特異な構造であり、堂内を等身大の四天王像や壁面の博仏により荘嚴するなど、組合せ式の三彩須弥山を祀るに相応しい構造となっている。

検出した仏堂は側柱^{がわばしら}で建てられており、この様式は中国の唐代から五代（8世紀～10世紀）の現存遺構にみられます。これらの建物は、いずれも3間×3間の柱間^{はしらま}ですが、内部に柱がないため須弥壇を広く取れるという特徴をもちます。検出した仏堂は、柱間は異なりますが、内部空間を広くするために中国から最新の建築様式を取り入れたと考えられます。また、堂内は、壁面を磚仏で荘厳し、等身大の四天王が本尊^{ほんぞん}を守護していました。まさにこの仏堂は、その立地からも「神雄寺」の本堂（正堂）と考えられます。なお、本堂正面を2間にするのは極めて特殊ですが、安置仏との関係を示していることは明らかです。

須弥壇中央には、礎石の抜き取り穴と考えられる遺構が存在し、これを心柱を支えた心礎とするか、本尊を安置するための台石^{だいいし}の跡とするかは判然としません。しかし、この遺構の周囲は築山状の高まりとなっており、建物と堂内の状況を総合的に判断すると、ここが、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの調査により曲水^{きよくすい}状池跡やその周辺から出土した組合せ式の三彩須弥山^{さんさいしゆみせん}を祀るに相応しい場所と考えます。

※ 大規模な仏教法会（燃燈供養）を執り行う特殊な装置としての「神雄寺」の存在は、いままでの古代寺院・仏教観を一変させるものである。

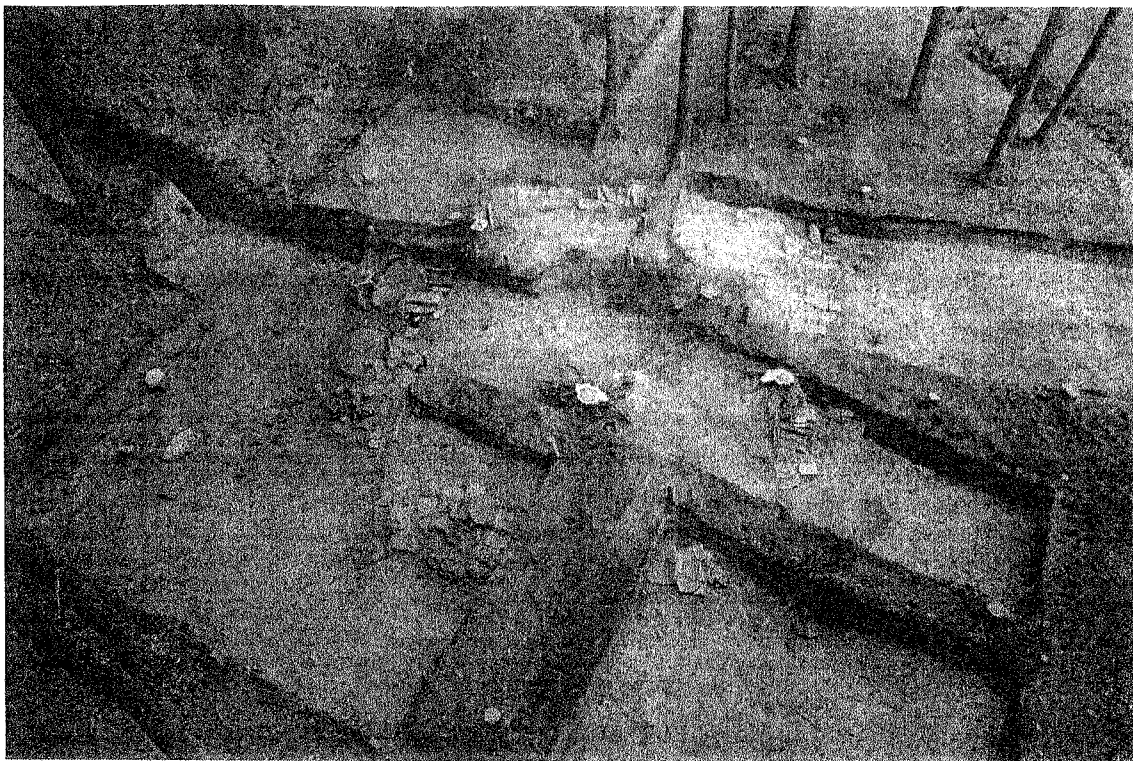
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの調査で検出した掘立柱建物跡(SB01)は、今回検出した本堂の正面に建物方位を同じくして建てられています。したがって、この建物が正堂に対する礼拝空間としての礼堂^{らいどう}（細殿^{さいでん}）であることは明らかです。しかも、本堂正面の庇^{ひさし}は、この建物に向かって長く伸び、あたかも軒廊^{こんろう}のように両者の連続性を示します。さらに、礼堂が建つ平坦面では大規模な燃燈供養が行われ、本堂背後の天神山は聖なる神山として聳^{した}えているのです。神山に湧く聖水は、大規模な法会^{ほうえ}の場（ステージ）を囲む池に蓄えられ、その場の清浄さを際立たせます。

大規模な法会^{ほうえ}を執り行う巨大な装置としての「神雄寺」の存在は、主に学会中心の平地寺院や山林修行^{さんりんしゆぎょう}を中心とした山岳寺院^{さんかくじいん}（山林寺院^{さんりんじいん}）とは異なる、別の寺院形態と考えざるを得ません。

※ 古代仏教における神仏習合や国家仏教のあり方など多くの問題に、「神雄寺」跡の調査は大きな一石を投じることとなった。



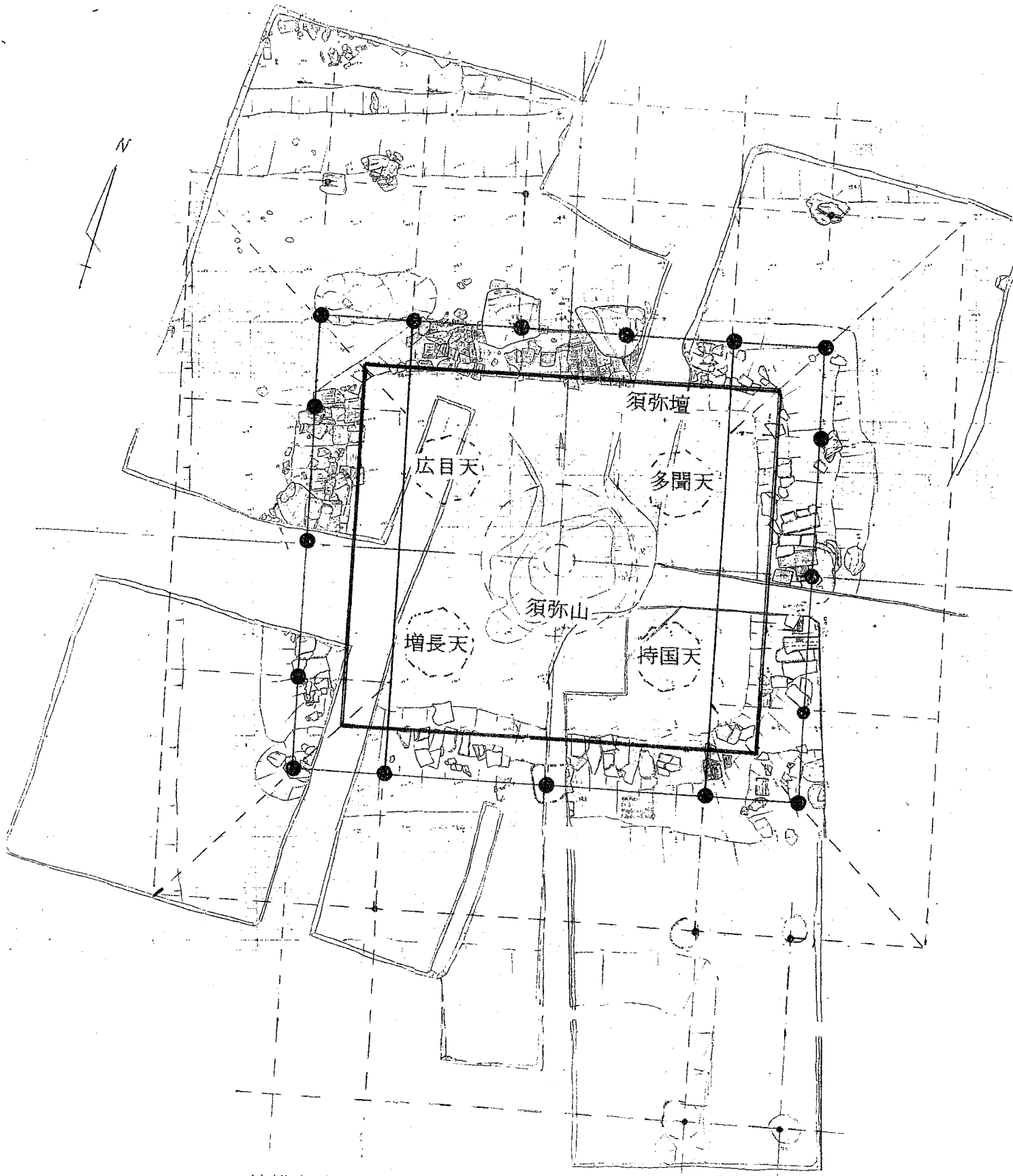
神雄寺跡での燃燈供養イメージ図 作画 早川和子



神雄寺本堂跡全景（西から）



本堂須弥壇北辺部（北西から）



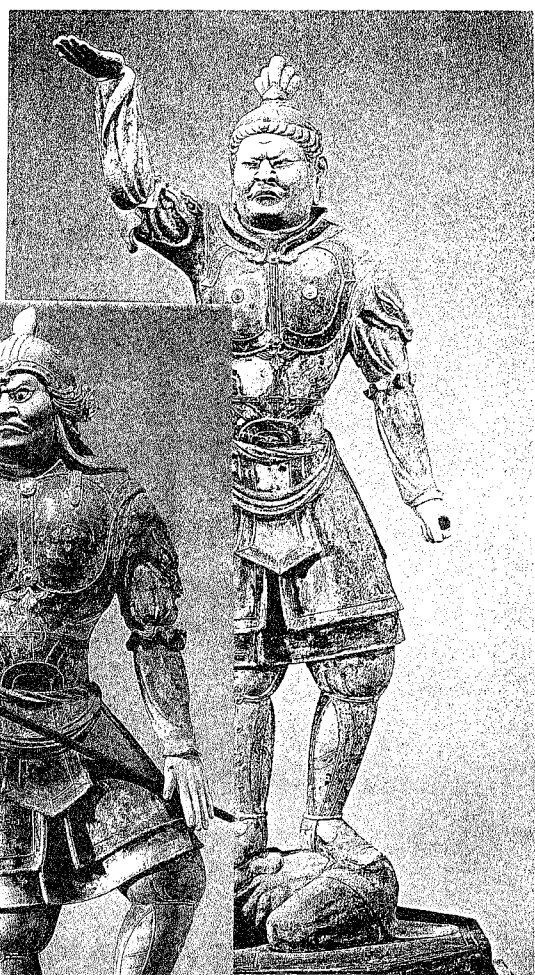
神雄寺跡本堂平面図・建物復原図

縮尺 1/50

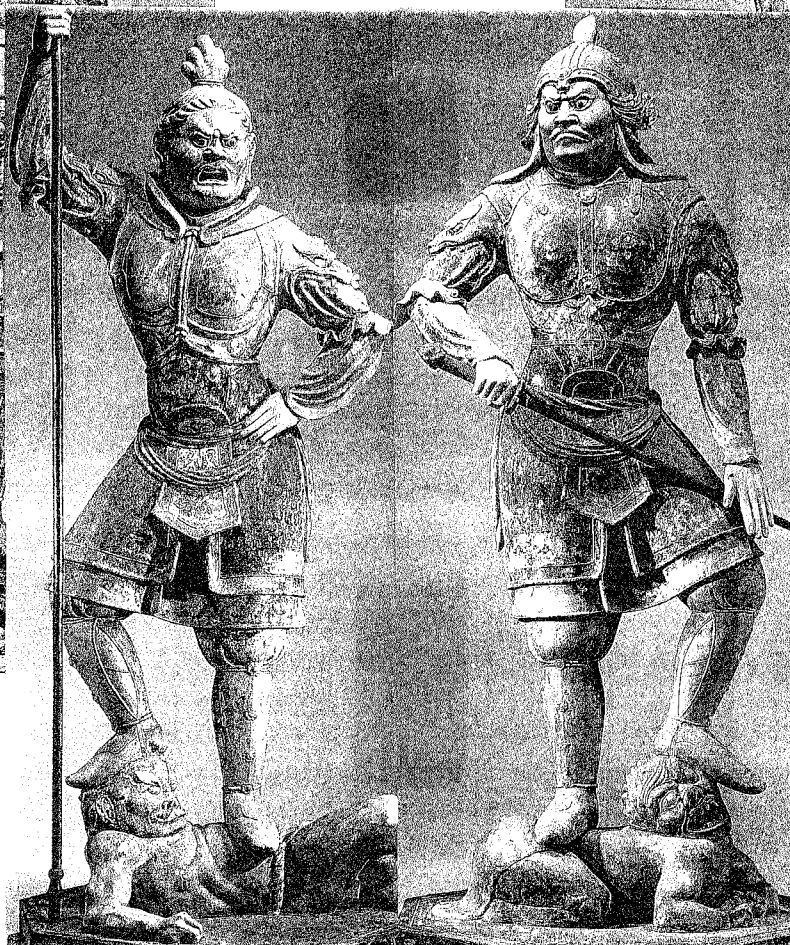
参 考



廣目天



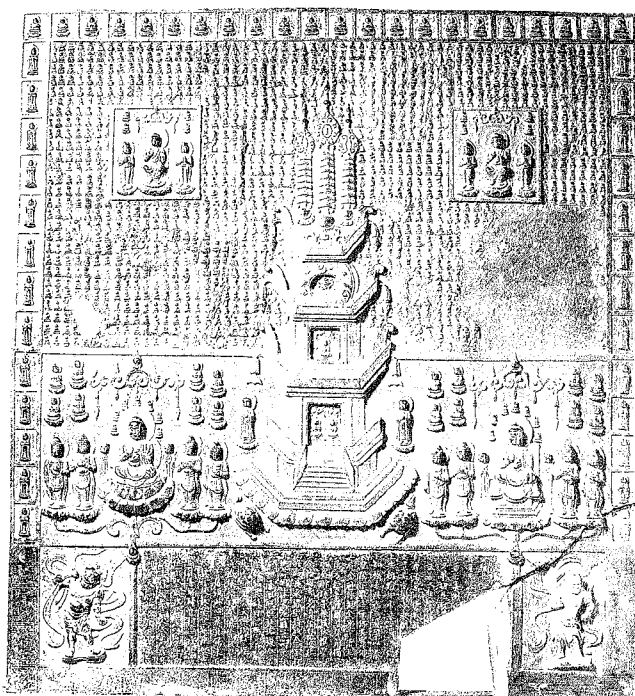
多聞天



增長天

持国天

東大寺戒壇堂
四天王立像 (塑像 8世紀)



長谷寺 銅版法華說相図 (縦 84.5cm)



橘寺 方形三尊磚仏 (縦 24.0cm, 横 19.0cm)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどは、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

TEL (075) 933-3877 (代表) FAX (075) 922-1189